

各位

金蘭千里中学校

## 本校入学者選抜試験問題に関するお願い

昨今、教育現場における著作権の在り方が議論されています。本校も、著作権法に基づいた著作物の適切な運用と管理に取り組んでいます。

本校の入試問題の利用につきましても、下記の点にご留意いただき、適切なご利用をお願いいたします。

### 記

1. 本入試問題の著作権は、本校に帰属します。複製の作成は、事前に申告いただいた場合のみ許諾します。

2. 本入試問題で引用している文学作品等の第三者の著作物は、関係団体を通じて、引用の許諾申請を行っています。

以上

# 令和7年度中学入試

## [中期B・J入試]

### 国語科 問題

#### じこう 注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2. この問題冊子は、表紙を含めて24ページあります。

試験中に、印刷が見づらかったり、ページの乱れや抜け落ちに気づいたりした場

合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。

3. 解答用紙は別に配布されます。解答はすべてその解答用紙に記入しなさい。

4. 問題冊子の余白等は下書きなどに利用してよろしいが、どのページも切り離して  
はいけません。

[中期B・J入試] 受験番号 \_\_\_\_\_

金蘭千里中学校

①次の文章を読み、後の間に答へなさい。問題に字数制限があるものは、すべて句読点や記号も一字とする。

今日もわたしはフレンドマートにお客様の声を響かせる。備え付けのボールペンはインクが切れていることが多いので、マイボールペンを持参している。インク代が自己負担になつてしまふが、ストレスなく書くためにはやむを得ない。さつき我が身に起つたことを、相手に伝わるよう丁寧に説明する。

六月十日午後四時三十分頃ごろ、有村さんのレジに並んでいました。わたしがレジの順番になつたのに、すでに精算を終えたご婦人が戻つてきて、レジ袋ぶくろを求めました。そのご婦人とチエツカーとの間で三円のやり取りが行われたのですが、ご婦人も再び列に並ぶべきであつて、レジの優先権はわたしにあつたのではないでしょうか。このやり取りにより三分のロスが生じました。今後このようなことがないよう注意してほしいです。

しかもご婦人は三円を支払うためにわざわざ小銭こせに入れを取り出し、一枚ずつ一円玉を取り出しました。もつとキャッシュレス決済を呼びかけることで、時間は短縮できます。ぜひご検討ください。

氏名…呉間 言実（くれま ことみ）

年齢…36

電話番号…080-○○○○-×××

氏名、年齢、電話番号を正しく申告するのはこだわりだ。平和堂フレンドマート大津打出浜店のツートップ、大澤幸雄店長と園田明慶店次長は実名入りで顔写真が貼り出されているのだから、わたしも名乗らなくてはフェアアじやない。二人はフレンドマートの屋号に恥じない

① 写真に収まっている。

②誤字脱字がないかチェックして、問題がなければ投函する。耳をすませても着地音は聞こえない。

店を出る瞬間は晴れ晴れした気分なのに、③帰宅してエコバッグをダイニングテーブルに置いた瞬間後悔する。またクレームをつけてしまった。三分ぐらい帰るのが遅くなつたところでこんな暇な主婦にアシジョウはないのに。

これまでの傾向によれば、明日には大澤店長から電話がかかってくる。明後日にはわたしの声が、店長のコメント入りで掲示板に貼り出されることだろう。

わたしはスマホを起ち上げ、「クレーマー やめたい」と検索窓に打ち込む。検索結果のほとんどは「クレーマー対応がつらくてやめたい」という④側の視点だったが、一つだけ「クレーマーをやめたいです」というbdoushiの相談が見つかった。そこには「今の生活に満

たされてないんですね」という回答がついている。相談者に寄り添つた言葉を並べているものの、具体的な改善策は書かれていない。回答者にクレームをつけたくなつたが、相談したのはわたしではないので我慢した。

わたしはため息をついてソファに横たわる。クレーマー気質がひどくなつたのは結婚してからだ。それ以前も何か嫌なことがあればお客様相談室に電話を入れていたが、それは配達ミスや商品のcippiなど、客観的にも苦情を入れて差し支えないケースだつた。

最近は行く先々で些細な出来事が気になる。そこで生じた嫌な気持ちが水につけた乾燥ワカメのように膨らみ、耐えられなくなつてクレームを入れてしまふ。お客様の声を書いているときは「フライードバックすることで店のためになるはずだ」と信じているのに、家に帰つて冷静になるとただの迷惑だつたのではないかと自己嫌悪に陥る。

神戸に住む義理の父、呉間一雄もdスジガネ入りのクレーマーだ。わたしを同類とみなし、クレームを共有してくれる。

中でも感銘を受けたのは「祝つてへんのか」である。

ラグビーワールドカップの日本開催を目指していた頃、神戸の街には「ワールドカップの日本開催を！」と書かれたのぼりがあちこちに立つていた。めでたく日本開催が決定した後も、のぼりは撤去されずそのままだつた。

違和感を覚えた義父は、神戸市役所に「祝つてへんのか」と電話をかけた。ほどなくして神戸じゅうののぼりが「ワールドカップ日本開催おめでとう！」に置き換わつたという。

⑤人の気持ちにまで介入するのはやりすぎだという気がしないでもなかつたが、そんなアプローチでもクレームがつけられるのかと感動すら覚えた。

「呉間」という名字がクレームを誘引しているのではないいかと疑つたこともある。しかし一雄の息子でわたしの夫、呉間祐生はまつたくクレームを言わない。父を反面教師に育つたのか非常に鷹揚で、飲食店でどれだけ待たされても、オーダーを間違えられても、文句ひとつ言わない。「ゆうせい」から「おうよう」に改名したらいいと思うほどだ。

祐生になぜ父のようなクレーマーを妻に選んだのか尋ねたところ、「身近な人がクレームを言つてくれるから心穏やかに過ごせるのかもしれない」と述べたうえ、

「俺みたいな人間ばかりだと世界は成長しないからね。親父やことちゃんみたいな人が必要なんだよ」

と、⑥わたしたちを認める発言までした。できることならわたしも祐生側の人間でありたかった。

(ある時、「わたし」はフレンドマートで万引きをしているおばあさんを目撃する。後日、そのことをアルバイト店員の「成瀬」に伝えると、「成瀬」から万引き犯の逮捕に協力してほしいと頼まれる。)

七月末になると本格的な夏休みに入ったようで、午前中から成瀬を見かけるようになった。レジやサービスカウンターに入り、表情の乏しい顔で接客をしている。店員は常に笑顔でいるよう教育されるものだと思っていたが、成瀬はあれで許されているのだろうか。

これまで成瀬のレジを避けてきたが、どんなものかと興味本位で並んでみた。

「いらっしゃいませ」

成瀬はわたしのかごの中の商品を一瞥して「三四〇〇」とつぶやき、商品のスキャンを始めた。

「なにそれ」

「かごの中身を見ただけで、合計金額を算出する練習をしているんだ」

「ユニクロかよ」

どんな人生を送ればこのように□と構えていられるのだろう。

「そうそう、もうじきときめき夏祭りだ。呉間氏もぜひ来てくれ」

成瀬の指さす先にはときめき夏祭りと書かれたポスターが貼ってある。わたしが「ふーん」と空返事をすると、成瀬はすべての商品を通し

終えて「三二八九円です」と言つた。

HOPマネーで精算してサッカー台に移つたわたしは、目の前のときめき夏祭りポスターを見て声を上げそうになつた。右下の写真には成瀬と見知らぬ女子が「司会…ゼゼカラ」のキャプションを付けられ並んでいる。

わたしが知らなかつただけで、成瀬は有名人だつたのか。わたしが成瀬のほうをちらつとうかがうと、アさつきと同じ無表情で商品をレジに通していた。

今までのわたしだったらきっと成瀬の勤務態度にクレームを入れていたに違いない。あのような無表情で接客されると怖いですか、客に対する（注）ホスピタリティが足りないとか、書きようはたくさんある。

しかしそもそも、なぜ店員は笑顔でいることを求められるのか。成瀬は正確にレジ処理をしてくれたし、それで十分ではないか。勤務態度にまでクレームをつけるのはただの憂さ晴らしだと思われてもしかたがない。まさに「祝つてへんのか」のヨリヨウイキである。

「失礼いたします」

成瀬がわたしの隣に買い物かごを置いた。少し遅れて、腰の曲がったおばあさんがやつてくる。イおばあさんのためにかごを運ぶサービスを行つたようだ。ますます完璧な接客である。見るともなくおばあさんの動作に目をやつたわたしは、呼吸を忘れた。

黄緑色のエコバッグ！

忘れもしない、あの万引きババアではないか。

あわててレジに目をやると、ウ成瀬はすでに次の客のレジ処理に入っている。ここで割り込むのはわたしがかつてクレームをつけた忌むべ

き行為である。自分のクレームが自分の X を絞めることになるなんて！

わたしはやむを得ず成瀬のレジに並んだ。そうしている間も万引きババアは荷物を詰めて帰る方向に向かっている。成瀬はおそらくわたしに気付いているだろうが、スピードアップすることなく前のご婦人の買った商品をレジに通していた。

間に合ってほしいという願いも虚しく万引きババアは店を出ていく。

「どうかしたのか？」

前の人レジを終えた成瀬がわたしに尋ねる。

「さつき、成瀬さんがレジを担当したおばあさんが先日の万引き犯です」

わたしが言うと、成瀬は目を見開いた。

「よく伝えてくれた。あれは佐々木さんだ」

「名前わかるの？」

「HOPカードに書いてあつた。わたしは一度見た顔と名前を忘れないんだ」

そんなこと可能なのかと突っ込みたいところだが、今は万引き犯のほうが問題だ。今日は犯行に及んでいないとしても、HOPカードを出して身元を明かすなんて自殺行為である。もしかしてわたしが見たのは間違いだつたのだろうかと不安になつていると、成瀬も「ずいぶん大胆だな」と同じことを思つてゐるらしかつた。

「ひとまず容疑者が特定できた。全従業員に共有するから、そのうち捕まるだろう。しかし万引き被害がなくなることはない。また気付いたことがあつたら教えてくれ」

わたしははつとした。こうして毎日営業しているスーパーで、盗みを働くのがあの万引きババア一人だけであるはずがない。また老齢女性にとらわれず、もつと視野を広く持つておくべきだつた。

「顔色が悪いぞ。休んでいくか？」

成瀬に顔を覗き込まれて、呼吸が苦しくなつていて氣付く。

「いえ、大丈夫です」

わたしは深呼吸をしたが、頭が熱くなつていて落ち着かない。またあのときみたいに倒れてしまつたらどうしようかと思つていたら、成瀬がレジから出でてきた。

「すまない、お客様の体調が悪くなつたので、家まで送つていく。レジを代わつてもらえるだろうか」

成瀬はほかの店員に声をかけて、わたしの荷物を持った。

「いやいや、ひとりで帰れるから」

「途中とちゅうで倒れたりしたら困るだろう。君の自宅が近いのは見当がついている」

成瀬はわたしの背中に手を添えて歩き出した。

「わたしに自宅を知られたくなれば、近くまで行つたところでごまかしてくれたらい」

「いや、そこだし」

オーミー大津テラスを出て、すぐそばに見えるマンションを指差す。

「レイクフロント大津におの浜はまメモリアルプレミアジデンスに住んでいるのか」

「成瀬さんも？」

こんなに長つたらしいマンション名を正確に言えるなんて、住人としか考えられない。

「いや。わたしが住んでいるのはびっくりドンキーの向こうに見えるマンションだ」

成瀬も徒歩五分程度のところに住んでいるらしい。

「住んでもないのにうちのマンションの名前言える人ははじめて見た」

「建設中にでかでかと書かれていたのだからみんな知つていてるだろ」

なるほど、エ一度見た顔と名前を忘れないと豪語ごうごするだけのことはある。

「このマンションができたのはまだ去年のことだろ。どこから引っ越してきたんだ？」

「大阪から」

祐生は三年前に大阪から滋賀に転勤になり、しばらく大阪から通つていたのだが、琵琶湖びわこを気に入つたそうで滋賀に引っ越そうと提案したのだ。環境かんきょうを変えたらわたしのクレーム癖へきも収まるかと期待したが、残念ながらそはならなかつた。

「大阪に引っ越して来てくれたおかげで出会えたんだな」

こんなYの浮くようなセリフ、よく言えるなと思つていてるうちにマンションのエントランスに着いた。ちょうど中年女性が中から出てきて、平和堂のエプロンをつけた成瀬に遠慮のない視線を向けている。彼女がクレーマーだったら、フレンドマートの店員が勤務時間中にうろうろしているとクレームをつけてしまうかもしれない。

わたしは相手に状況じょうきょうがわかるよう、「体調が悪くなつたわたしをここまで連れてきてくださいありがとうございました」と大きな声で説明した。

成瀬は才急に様子が変わつたわたしにも臆おくすることなく「ありがとうございました、またのご利用をお待ちしています」と明瞭めいりょうに発声してお辞儀じぎをすると、店の方へと戻つていつた。

（大津市打出浜のスーパーで食料品など三千円分を万引きしたとして、大津署は二日、大津市在住の女性を現行犯逮捕した。女性は同店で数十回にわたって万引きをした疑いがあり、目撃情報が寄せられていた）

数日後、新聞の地域面に小さく載ったニュースを見て、わたしは天を仰いだ。わたしの声が、目撃情報として犯人逮捕に結びつくなんて。これまでモヤモヤと発してきたお客様の声が、向こうの山まで届いてやまびことして返ってきたようだ。

祐生は「ことちゃんのおかげで犯人が捕まるなんて、すごいね」と手放しに褒めてくれた。主婦になって以来、いや、それ以前の人生を含めても、一番の達成感かもしれない。わたしはその新聞記事を切り抜き、ピンクの水玉のマスキングテープで手帳に貼り付けた。

（宮島未奈『成瀬は信じた道をいく』より　一部改めたところがある）

（注）ホスピタリティ……客に対するおもてなしの心。

（一）波線部 a～e のカタカナを漢字に直しなさい。

a シショウ b ドウシ c フビ d スジガネ e リヨウイキ

（二）①に入るもつとも適切な表現を次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 晴れやかな表情で  
イ 貫禄のある風貌で  
ウ どこか不機嫌そうに  
エ 親しみのある笑顔で  
オ いかめしい顔つきで

(三) 傍線部②「誤字脱字がないかチェックして、問題がなければ投函する」とあるが、「わたし」の書いたクレームの特徴を説明したものとして不適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 出来事が具体的に述べられている。

イ 店長の責任を追求している。

ウ 感情を抑えて書かれている。

エ 時系列に沿つて説明している。

オ 店側に改善策を提示している。

(四) 傍線部③「帰宅してエコバッグをダイニングテーブルに置いた瞬間後悔する」とあるのはなぜか。その理由としてもつとも適切なもの

を次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア いちいちクレームを言うことで、自分の貴重な時間を消費してしまったから。

イ いくらクレームを投函しても、店長からお決まりの対応しか返つてこないから。

ウ 嫌なことがある度にクレームを入れていて自分が嫌になってしまったから。

エ 店のためを思つてクレームを言つているのに、誰もわかつてくれないから。

オ 結婚してからクレームの頻度が多くなっていることで夫に不満を感じているから。

(五) ④に入るもつとも適切な語句を次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 利用者 イ 店員 ウ 主婦 エ 相談者 オ 消費者

(六) 傍線部⑤「人の気持ちにまで介入するのはやりすぎだ」とあるのはどういうことか。次のように説明した文の（I）～（III）に入るもつとも適切な語句を次のア～オの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

「祝つてへんのか」という言葉は、「ワールドカップの日本開催を!」というのぼりを放置していることに対しても（I）～する

I 「ア 侮辱 イ 容認 ウ 懸念 エ 抗議 オ 共感」

II	「ア	満足	イ	祝福
III	「ア	宣言	イ	応援
			ウ	歓喜
			ウ	無視
			エ	不敬
			エ	尊敬
			オ	正義
			オ	強要

(七) 傍線部⑥「わたしたちを認める発言までした」とあるが、この時の「わたし」の心情を説明したものとしでもつとも適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「わたし」や父のようないくつもよく表れている「成瀬」の行動を本文中の破線部ア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。  
 イ 「わたしたち」のようなクレーマーの気持ちをまったく理解しようとしない夫に不満を抱いている。  
 ウ 「わたし」や父のように小さなことに腹を立てず、他者に寛容な夫をうらやましいと思っている。  
 エ 「わたし」のようなクレーマーとなぜ結婚したのか、はつきり説明しない夫を歯がゆく思っている。  
 オ 「わたしたち」のようなクレーマーを認める発言をする夫の真意をはかりかね、不審に思っている。

(八) ⑦には「何事にも動じず、落ち着いているさま」という意味の四字熟語が入る。

(1) その四字熟語を次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 茫然自失

イ 泰然自若

ウ 周章狼狽

エ 大器晩成

オ 傍若無人

(2) また、その様子がもつともよく表れている「成瀬」の行動を本文中の破線部ア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア さつきと同じ無表情で商品をレジに通していた

イ おばあさんのためにかごを運ぶサービスを行ったようだ

ウ 成瀬はすでに次の客のレジ処理に入っている

エ 一度見た顔と名前を忘れないと豪語する

オ 急に様子が変わったわたしにも臆することなく

(九) □X、□Yに身体の一部を表す漢字をそれぞれ一字ずつ記入し、意味が通るようにしなさい。

(十) 二重傍線部「今日もわたしはフレンドマートにお客様の声を響かせる」とあるが、このような「わたし」の行動がやがて報われる結果になる。それを比喩を用いて表現した一文を本文中より探し、その最初の六字を抜き出して答えなさい。

②次の【詩】と【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】とを読み、後の問い合わせに答えなさい。

【詩】

夕焼け

いつものことだが  
電車は満員だった。  
そして

いつものことだが  
若者と娘むすめが腰をおろし  
としよりが立っていた。  
うつむいていた娘が立って  
としよりに席をゆずった。  
i そそくさととしよりが坐すわった。

礼も言わずとしよりは次の駅で降りた。

娘は坐った。

別のとしよりが娘の前に  
横あいから押おされてきた。

娘はうつむいた。

しかし  
また又立つて

席を

そのとしよりにゆずった。

としよりは次の駅で礼を言つて降りた。

娘は坐つた。

二度あることは と言う通り

別のとしよりが娘の前に  
押し出された。  
可哀想に

娘はうつむいて

そして今度は席を立たなかつた。

次の駅も

次の駅も  
下唇したくちびるをキユツと噛かんで

身体からだをこわばらせて——。  
僕は電車でんしゃを降おりた。

固くなつてうつむいて  
娘はどこまで行ゆつたろう。

やさしい心の持主は  
いつでもどこでも

われにもあらず受難者うなんしゃとなる。

何故なぜつて

やさしい心の持主は  
他人のつらさを自分のつらさのように  
感じるから。

やさしい心に責められながら  
娘はどこまでゆけるだろう。  
下唇を噛んで

つらい気持で

美しい夕焼けも見ないで。

(小池昌代編『吉野弘詩集』より)

一部改めたところがある)

## 【文章 I】

一篇の詩が長く読まれていく——一人の個人が長い年月をかけて読んでいく場合もあれば、世代を違えて多くの人間が読み継いでいく場合もある。書いた本人は、「書いたあとのこととは知らない」と言うかもしれないが、作者の手を離れ、詩が生き続けることこそ、どんな栄誉にもまさる詩人の栄光に違いない。優れた詩のすべてが そうなるというわけではないのだから、これは一篇の詩の持つ、運命とも徳ともいえるものだろう。もちろんそこには、「読者」という存在がある。

吉野弘は、まさにそのような作品、そのような読者に恵まれた詩人だ。日常をアザイとし、そこに詩を発見した作品は、意味を手放さず、わかりやすい。それでいて、意味を超えて、言葉にならない深みへと読者を連れていく。

吉野弘が書いたにもかかわらず、その作品には、どこか作者のものではないという表情があつて、別の言い方をすると、おれが書いたのだぞという主体の痕跡が薄い。何かが吉野弘をして書かせ、それをわたしたちが読むことによって、ようやく一篇が完成するといった、あたたかい気配がある。

(中略)

代表作の一つ、多くの読者を持つ「夕焼け」(『幻・方法』)を、今、改めて読んでみようか。夕方の満員電車で、席を「としより」にゆ

ずる「娘」の葛藤が詩になつてている。

何かの折に幾度も読み返してきた作品だ。詩のリズムは静かで、波のない湖面をゆく舟のように、中心にいる娘には、異物感がある。不器用で、もたついていて、突破できず、躊躇している。しかしそれゆえに、わたしたちは、この作品を記憶してしまう。

これは別の詩だが、「尾を垂れた重そうな体を／翼で吊り上げながら飛ぶ尾長の／姿がなぜか私は好きだ」という作品がある(「林中叙景」／『叙景』所収)。詩の続きはこうだ。「あの飛びかたは軽快でなく／飛ぶことに努力の要るさまが／はつきり見えるからだ」。

吉野弘は、こういうものを大切にする。A、簡単にすーっといくものより、なかなか、うまくいかないもの。ちょっと重たくて、その重さを、自分自身、持ちあぐねながら、努力して現状をどうにかしようとしているもの。そういうものに目をとめ、詩にすくい上げてきた。「夕焼け」でも、人を思いやる不器用な娘のこころが、極めて丁寧に追いかけられている。

いつものことだが

電車は満員だった。

そして

いつものことだが

若者と娘が腰をおろし

としよりが立っていた。

うつむいていた娘が立つて  
としよりに席をゆずった。

詩では、このあと、娘が席をゆずった「としより」が駅で降り、また娘が座すわったが、「別のとしより」が現れ、同じことが繰り返かえされる。  
三度目にまた、「別のとしより」が現れたが、今度は、娘は席をゆずらなかつた。

道徳的に b サバクのであれば、「三度目となろうとも、娘は同じように席をゆずるべきではないか」とか「なぜ、娘ばかりが席をゆずらなければならぬのか。他の人はいつたい何をしているんだ?」ということになるが、詩はただ、その状況を映すだけで、何も力を貸さない。  
主張もしない。 c ヒバンもしない。  
一箇所だけに、「僕」が出てくる。この詩を書いている詩人その人と読める。

二度あることは と言う通り

別のとしよりが娘の前に

押し出された。

可哀想に

娘はうつむいて

そして今度は席を立たなかつた。

次の駅も

次の駅も

下唇をキュッと噛んで  
身体をこわばらせて――。

僕は電車を降りた。

固くなつてうつむいて

娘はどこまで行つたろう。

「僕は電車を降りた」。その行で、わたしたちは、娘を見ていた詩人の存在に気づく。

かれ  
彼はしかし、娘が席を立たなかつたのを黙認もくにんして、

娘に接触することなく電車を降りてしまう。だが作者が消えても、この詩は終わらない。娘を乗せた電車は走り��けていく。

美しいと思う。①この詩の美しさは、作者が電車を降りたあとに始まる、といつていいかもしない。降りてしまったのだから、あとのことはもう、誰も見ていない。見ることができない。その見えない世界のなかに娘が一人いる。確かにいる。

やさしい心の持主は

いつでもどこでも

われにもあらず受難者となる。

やさしさが難を招くというのは、たぶん、そのとおりなのだろう。「席をゆずる」というささやかな行動であつても、一旦、他者に関わつていこうとするならば、そこにはただごとではない関係が生じていく。人と人とは、親しい関係ほど厄介で、錯綜する思いも、ほとんどの場合、相手に伝わらない。わたしには、人間関係を、災害とも事故とも呼びたい気持ちがある。

吉野弘は会社勤務を経験し、労働組合にも関わった。労働者の立場から、組織と個人のあつれきを詩にもしている。人間の姿をあたたかく詩に書いたが、dコンティには、人間嫌悪も絶望もあつたはずだ。

それにしても、「夕焼け」の娘は、電車のなかの一種の生贊。娘だけが悩むのは理不尽なことであるが、彼女はこの状況に耐えるばかりだ。その姿が見えるようを感じるもの、多かれ少なかれ、②わたしたちのなかにも、この「娘」が住んでいるからだろうか。席を立つてゆずつた立派なほうの娘でなく、十分に他者の痛みを感じながらも、席をゆずらなかつた複雑な思いの娘。いわば正義の影で葛藤し、引き裂かれているのが、人間の姿という認識が作者にあつたのだと思う。

しかし若いころ、わたしはこの詩を読んで、かすかな抵抗を覚えたことも記憶している。娘はとてもけなげだ。生意気のかけらもなく、謙虚で慎ましい。無垢そのもの。「次の駅も／次の駅も／下唇をキュッと噛んで／身体をこわばらせて——」ここに、若かったわたしは、「演技」を感じた。娘にはもつとぼんやりとフツーでいてほしかつた。現代人はやさしさという言葉、やさしい心という言い方に用心深くもなる。作者が娘を、「可哀想に」と書き、「やさしい心」と書き、そう決めてしまつたことにも、おそらくわたしは抵抗を覚えていた。娘の本心など、誰にも見えるはずはないからだ。

吉野弘の詩は、読んで意味がわからない詩ではない。  
B 意味で読ませていく。現代詩が、言葉の意味からどんどん遊離していくなか、  
このように、意味を手放さずに詩を書こうとする困難は、ひとつたたかいのようにもみえる。しかしそこには、作者の世界解釈がどうし  
ても入ってきて枠を決めてしまうという難しさもあつた。つまりある種の押し付けがましさがでてくる。  
C わたしはこの詩が好きだつたし、今読むと、娘の耐える描写に多少誇張を感じるにしても、そのけなげさを可愛いと思う。いかに

も「昭和の娘」だなと思うが、今もどこかの車両を探してみるといい。こんな娘がどこかにきつといる。かつてはわたしたちも、こんな娘だったのではないか。

それにしても彼女は、三度目でなぜ、席をゆずらなかつたのか。自分がいい人でいることに挫折したのかもしれないし、何度も同じことをするのに、くじけたのかもしれない。ふいに面倒になつたのかも。あるいは恥ずかしくなつたのかも。理由はおそらく本人にも説明できなくて、事実としてあるのは、ゆずらなかつたということだけだ。

最後の行に、夕焼けが出てくるのがいい。電車の外には、「夕焼け」が広がっていた。だが娘はうつむいていたので、この「夕焼け」に気づかない。そういうことはある。それでも夕焼けのなつか電車は走つていく。ならば夕焼けと娘は、それぞれがばらばらで無関係かといえば、そうではなく、娘のほうが気づかなかつたとしても、夕焼け空のほうが娘を見ている。

夕焼けは自然現象であり、ただそこに広がつてているだけなのに、あたたかい人格のようなものが感じられる。人間をみまもる「眼差し」そのものが、夕焼けとして広がつてているように感じる。

自然を見るうちに、自然のほうから見つめられる。不思議だが、吉野弘の詩を読んでいると、そういう感触を得ることがある。自然と人間とのあいだに還流がおこつていて、自然のまなざしがふいに人間世界へさしこまれる。それは恩寵の瞬間である。

(小池昌代「還流する生命」より　一部改めたところがある)

## 【文章Ⅱ】

ここに掲げた吉野弘の詩篇を、これまでに何度読んだことだろう。そして、良い詩だからと誰彼の区別なく読んでみると、何度他人にすすめてきたことだろう。とても数えきれるものではない。

このように平易な言葉で、人間のありようを、意外なアングルからとらえてみせる詩人は、私の知る限りでは吉野さんを含めても十人とはいひはずだ。そして、その「意外なアングル」が、実に極めて日常的な感覚を踏み外すことなく設定できている詩人はというと、さらに入れは絞られるだろう。

「不思議な詩人」という言い方は形容矛盾かもしれないが、私にとつての吉野弘は、いつだつて「不思議な詩人」として自覚されつづけてきた。難解な言葉を存分に駆使する詩人ももちろん素敵だが、しかし、吉野さんのように難しい言葉をほとんど使わずに書ける詩人は、もつと素敵だ。読んでいると、なんだか魔法にかけられたような陶酔感さえ覚えてしまう。

読者のなかで、詩を書きはじめてまだ日の浅い人は、さほど吉野さんの詩に感心しない人もいるだろう。きっと、いるはずである。その理由は、平易な言葉使いや誰でもが経験のある（あるいは経験可能な）普通の体験から書かれているからであつて、たいていの初心者が、詩はもつと現実離れを目指したジャンルだと思つてているところからきてる誤解から、そう思いがちなのである。

「こういう詩だつたら、私にもすぐに書けそうだ」

そんな感想を読者に抱かせる詩人こそが、実はまことにもつてどうにも動かしようもない完璧な詩人であることを、そういう人たちにははやくわかつてほしいと思う。吉野さんの詩の良さがわかるかどうかは、みずから作品の書き方や言葉の使いぶりや、あるいはまた人生観や社会観がどうであれ、その人のいわば、「詩人度」を計測する物差しだといつても<sup>e</sup>カゴンではない。私は、いつもそう考えてきた。

人間の「やさしさ」について考えながら書かれた作品は数かぎりないけれども、このように予想外の角度から、簡潔直截にわかりやすく私たちに教えてくれる詩は、少なくとも我が国には、この作品が書かれるまでは存在していなかつたのではないか。

この詩を読みなおすたびに、「いやあ、現代詩つて実に良いものですねえ」と、某映画評論家の口真似（ほうえいがひょうにんのかほまね）をしたくなってしまう。  
押し売りをしているわけではない。そんなつもりはカケラもないけれど、私に何度もまくしたてられて辟易氣味（へきえき）の友人がいたことも確かだ。

それはもちろん私の説明がへたくそだつただけのことなのであって、吉野さんとは関係のない事柄である。  
それにしても、この娘は「固くなつてうつむいて」どこまで行つたのだろうか。ただひとつ私にわかるのは、娘が車内で起きたことを、その後誰にも話さなかつただろうということだけだ。

こういう「やさしい心の持主」は、きつといふ。どの電車にも、きつと乗つている。満員電車に乗つたら、ときにはこの詩を思い出してほしい。

（清水哲男『現代詩つれづれ草』より　一部改めたところがある）

(一) 波線部 a ∕ e のカタカナを漢字に直しなさい。

a ザイ b サバ(く) c ヒハン d コンティ e カゴン

(二) 【詩】の一重傍線部 i 「そそくさと」の、この詩の中での意味としてもつとも適切なものを次のア ∕ エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア うれしそうに イ あわてた様子で ウ えらそうに エ 傷ついた様子で

(三) 【文章 I】の一重傍線部 ii 「躊躇（ちゅうちよ）している」の、この文章の中での意味としてもつとも適切なものを次のア ∕ エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア いやになつてている イ はずかしそうにしている ウ ためらつてている エ あきらめている

(四) 【文章 I】の A ～ C にあてはまる語句を次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。(同じ記号を繰り返し選んではいけない)

ア おそらく イ すなわち ウ それでも エ しかも オ むしろ カ また

(五) 傍線部①「この詩の美しさは、作者が電車を降りたあとに始まる」とあるが、筆者の考える「電車を降りたあと」に描かれている「この詩の美しさ」の説明としてもつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 席をゆずることができなくて耐えしのんでいる娘のやさしさを夕焼けがあたたかく見守っていること。  
イ 見えない世界のなかで老人に席をゆづった娘の行為に、娘のけなげさや可愛さがあらわれていること。  
ウ 電車を降りたあとの娘の様子を作者が想像して、詩にすることで永遠に語りつがれるものにしたこと。  
エ 席をゆずることで他人と関わっていこうとした娘の挫折を夕焼けの中を走る電車とともに描いたこと。

(六) 傍線部②「わたしたちのなかにも、この『娘』が住んでいる」とはどういうことか。その説明としてもつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間はだれもが「電車の娘」であり、他人の痛みを感じて席をゆずる立派な行動をとることができること。  
イ 人間の心の中にはけなげで謙虚な他人を見てフツーじやないとかすかな抵抗を感じる厄介なところがあるということ。  
ウ 人間は正義を貫くことを願いながらも周りの視線を感じてやめてしまうという弱さを生まれながらに持っているということ。  
エ 人間の中には正しいことをしようと思いながらそれができなくて、そのつらさに苦しむという側面があるということ。

(七) 【文章 II】の二重線部Ⅲ「意外なアングル」と同じような意味で用いられている言葉を、【文章 II】の中から六字で抜き出して答えなさい。

(八) 【文章I】で筆者は吉野弘という詩人をどのような人であると述べているか。その説明としてもつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 言葉の意味を大切にしつつ、日常生活で発見したものを詩に描いて、たくさん的人に読み継がれている人。  
イ 詩が多くの人間に長い間読まれ続けているということを、詩人にとつてこのうえない名譽だと感じている人。  
ウ 読者を大切にして、世代を超えた読者に満足してもらえる作品を作りつづけるための努力を欠かさない人。  
エ 自分の作品だと強く主張することはせず、読者に読まれることで作品を完成させようと/or>する他人任せな人。

(九) 【文章II】で筆者は吉野弘という詩人をどのような人であると述べているか。その説明としてもつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日常的な感覚の中で、難解な言葉を使いつつ、それを難しいと思わせない魔法使いのまほつかような技を持つた人。  
イ 難しい言葉を使わずに、誰もが経験するようなことを詩にする、詩人として申し分がないほどすぐれている人。  
ウ 詩を書きはじめて間もない人が、この先本当に詩人として活動できるのかを見きわめることのできる不思議な人。  
エ 自分にも書けるという誤解を与えてしまうほど平易な言葉で詩を書いていたため、なかなか正當に評価されない人。

(十) 【文章I】と【文章II】の、「夕焼け」という詩のどちら方はどのようなところが似ているか。その説明としてもつとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日常的な感覚をもとにあたたかく描かれた電車の中の不器用な娘を見て、きっと彼女は幸せになれる信じているところ。  
イ 席をゆずることを運命づけられた娘のことをかわいそうに思い、無関心な周囲の人間たちを道徳的に非難しようとするところ。  
ウ 平易な言葉で人間のあり方が鋭くとらえられているが、その書き方には押しつけがましさがあると感じているところ。  
エ 電車で二度老人に席をゆずった娘のやさしさに注目して、このような娘はきっとどこかにいると考えているところ。

(十一)【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】の「夕焼け」という詩のとらえ方としてもつとも適切なものを、次のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 電車の音が作り出す静かなリズムの中に漂う心地よい世界がやさしい娘を包みこんで、言葉の意味を忘れさせて魔法にかかったような陶酔をもたらしてくれる。

イ けなげな娘を生贊にして見捨ててしまう冷たい現代社会の姿を平易な言葉でありのままに描くことをとおして、世の中を変えていきたいという願いを表している。

ウ 娘を乗せて走る電車の外にただそこに広がっているだけの自然に人格のようなものが感じられ、その眼差しが人間のもとに戻っていることが感じられる。

エ 電車の中の乗客と娘の関係は、会社とそこでの理不尽な仕打ちに悩む働く人たちの関係を示していて、その中には人間にに対する嫌悪や絶望の気持ちがこめられている。

オ 三人目の老人に席をゆずることができず、固くなつて下を向いてしまつた娘は、車内でのできごとを電車から降りたあと誰にも話さなかつただろうと考えられる。

カ 夕焼けの中を電車が走っていること人々が気づいていないことをそれとなく示して、人々が毎日を生きることに精一杯であることを美しく表している。

③ 次の（一）～（四）の文章の内容から確実に正しいと言えるものを、後に続くア～ウの中から、それぞれ記号であるだけ選びなさい。

一つも正しいものがない場合は、「×」と答えなさい。

（一）野生のアナウサギの毛色は、本来茶色の1種類しかありません。これは、周囲の環境に同化して天敵に捕食されにくくするためです。野生ではないカイウサギにたくさんの色があるのは、「飼われる」という形で人間に保護されていて天敵に捕食されることがないからです。ちなみにウサギは、耳の先が濃い色になっています。これはお互いを同じウサギだと見極めるためのいわば標識としての機能を持っています。

ア 野生のアナウサギの毛色は周囲と同化する茶色なので天敵に捕食されることはない。

イ 野生のアナウサギは耳の先が濃い色になっている。  
ウ 人間に保護されているカイウサギは天敵に捕食されることはない。

（二）広島県には「府中市」と「府中町」があります。「府中市」は昔の行政区分「備後国」の国府、つまり役所が置かれていたので「備後府中」と呼ばれており、「府中町」は昔の行政区分「安芸国」の国府が置かれていたので「安芸府中」と呼ばれています。「府中町」は周囲を全て広島市に囲まれており、大手自動車メーカーの本社などもあり、日本で一番人口の多い「町」となっており、同じ広島県の「府中市」より人口が多くなっています。なお、東京にも「府中市」がありますが、ここには「武藏国」の国府が置かれています。

ア 広島県府中市は広島県府中町より人口が多い。  
イ 東京都府中市より広島県府中市の方が人口は多い。  
ウ 広島県府中町の町境は全て広島市と接している

(二) 医師不足の原因はいくつかあります。一つは医師の都会へのかたよりであり、結果として地方の医師が不足することになります。また、

女性医師が増加したことに対する制度設計が追いつかず、出産や育児をきっかけに医師をやめてしまう女性が多いことも問題です。出産や育児と業務を両立させるための環境を行政や病院側が用意する必要があります。また、診療科を医師が自由に選択できるようになつたことも大きな問題です。業務負担の大きい診療科の医師が不足することとなつてしましました。医師の働き方改革をすすめることは、国民が住む場所やかかつてている病気に関係なく等しく医療にアクセスできるためにはぜひ必要です。

ア 医師不足を解消することで国民は医療にかかりやすくなる。

イ 出産や育児と医師の業務との両立は難しい場合がある。

ウ 診療科を医師が自由に選択できなかつた時の方が医師の不足の度合いは小さかつた。

(四) ブリはスズキ目アジ科に属する魚で、成長に応じてその名前を変えていく「出世魚」であり、地方によつてその変えていく名前が異なります。

関西地方では「ツバス」「ハマチ」「メジロ」「ブリ」の順に、関東地方では「ワカシ」「イナダ」「ワラサ」「ブリ」の順に名前を変えて成長していきます。成長段階で魚の呼称こしょうを変えて楽しむ習慣は、昔の武士が成人や昇進しょうしんで名前を変えていくという習慣に起源があると言われており、日本特有の習慣です。英語にはこのような習慣はなく、例えば「ブリ」のことは成長段階を問わず「イエロー・テイル」と呼びます。

ア 英語で「イエロー・テイル」と呼ばれる魚は、東京では「ハマチ」と呼ばれる。

イ 関西地方ではブリの幼い状態を「ワカシ」と呼ぶ。

ウ 元服や昇進で武士が名前をえることの起源は出世魚である。



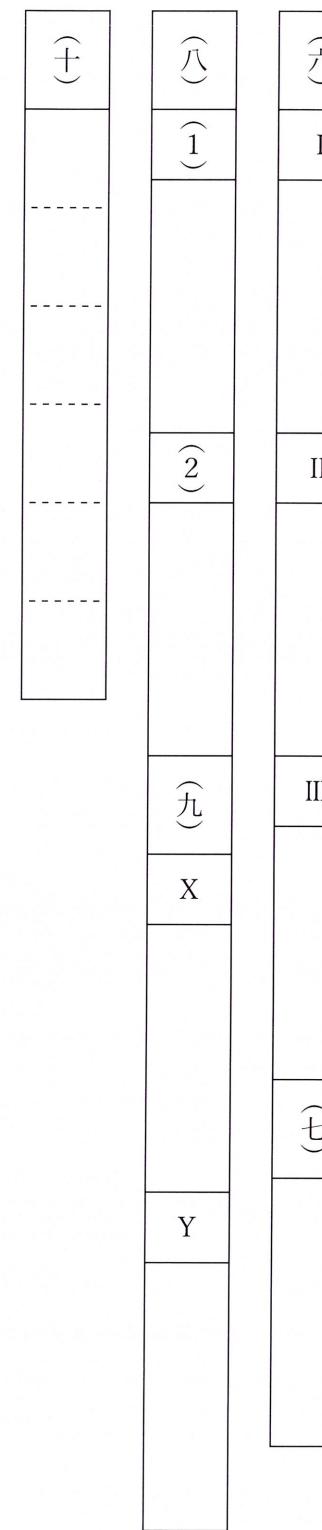
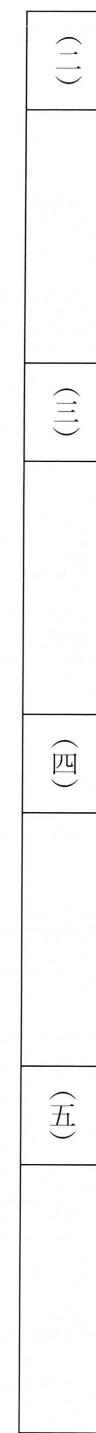
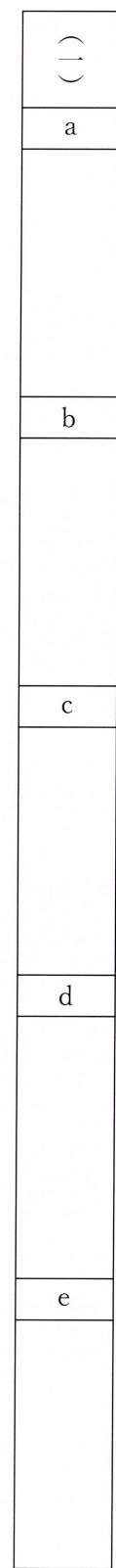




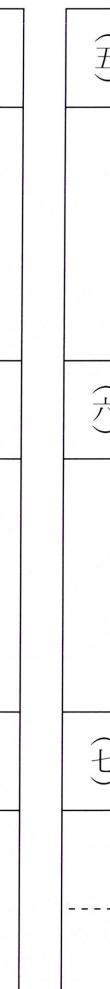
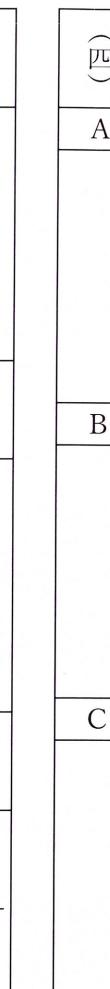
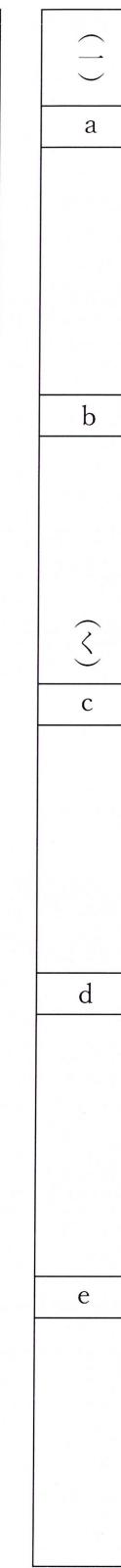
令和七 中入 国語「中期B・J」解答用紙

金蘭千里中学校

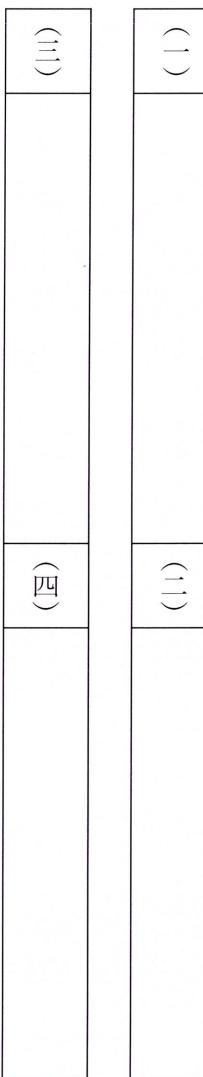
①



②



③



(三)

(四)

得点	
受験番号	

令和七 中入 国語「中期B・J」解答用紙

金蘭千里中学校

(1)

(三) a	支障
(四) b	同志
(五) c	不備
(六) d	筋金
(七) e	領域

(三) I	工
(四) II	イ
(五) III	オ
(六) IV	ウ
(七) V	イ

(八) ①	イ
(九) ②	オ
(十) ③	首
(十一) ④	ウ
(十二) ⑤	イ

(七) こ	れ
(八) ま	で
(九) も	ヤ
(十) ヨ	ウ

(一) a	材
(二) b	裁 <small>(ミ)</small>
(三) c	批判
(四) d	根底
(五) e	過言

(一) A	イ
(二) B	オ
(三) C	ウ
(四) ①	ア
(五) ②	エ
(六) ③	イ
(七) ④	工
(八) ⑤	ア
(九) ⑥	イ
(十) ⑦	エ
(十一) ⑧	ウ
(十二) ⑨	工

(3)

(三) ア・イ・ウ	イ・ウ
(四) X	ウ

得点	
受験番号	